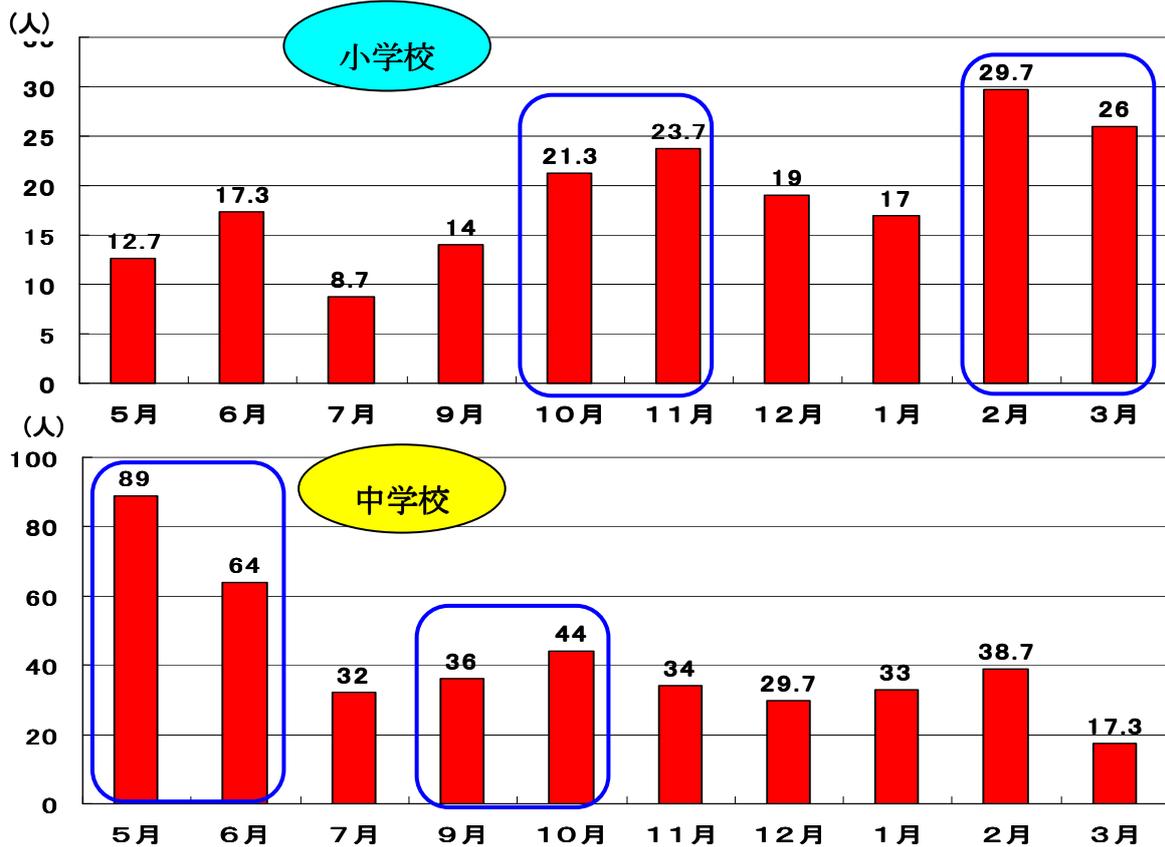


# 不登校を生じさせない学校づくりをめざして

## ～ 調査結果の分析からみえる不登校児童生徒増加の傾向 ～

**小・中学校で違う，不登校児童生徒が増加する時期**

30日以上欠席した児童生徒数の前月比増加数(H20～22年度の平均値)



上のグラフは、30日以上欠席児童生徒数について、過去3年間の前月比増加数の平均をとって調べたものです。

**小学校**

**2月と3月が一番多い**  
 → 毎月3～4日程度の欠席が積み重なり、年度末近くになって30日のラインを越す子どもが圧倒的に多くなるということ。

**次に多いのは、2学期の半ば**  
 → 夏休み明けから休み始めて、連続欠席になっているグループ。

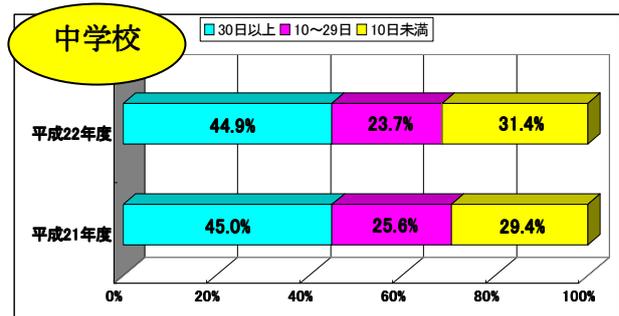
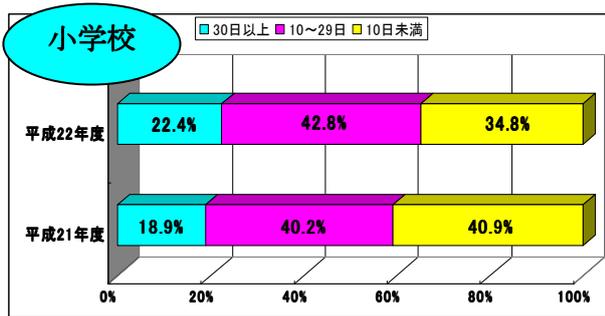
**中学校**

**圧倒的に多いのは5月6月の年度初め**  
 → 前年度から引き続いて休んでおり、4月からほとんど登校できておらず、授業日数が30日を超えるとすぐに欠席数も30日を超えるグループ。

**もう一つのグループは、夏休み明けに30日を超えるグループ**  
 → 1学期はボツボツ休みながら、何とか夏休みまでは登校していたけれど、2学期からは連続して休むようになったグループ。

## 2学期以降休み始める子どもが、小学校4割、中学校3割

30日以上欠席した児童生徒の欠席日数別人数の割合(7月末時点)

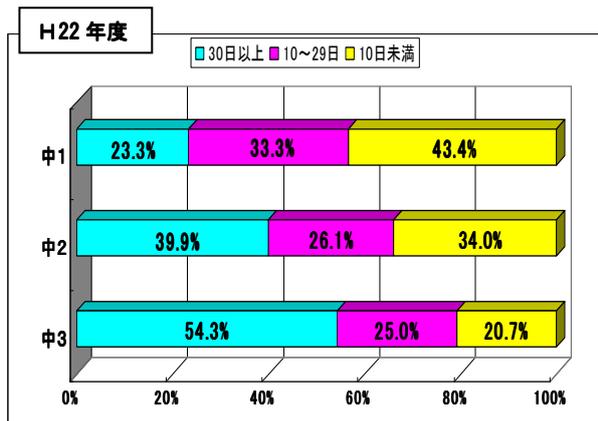
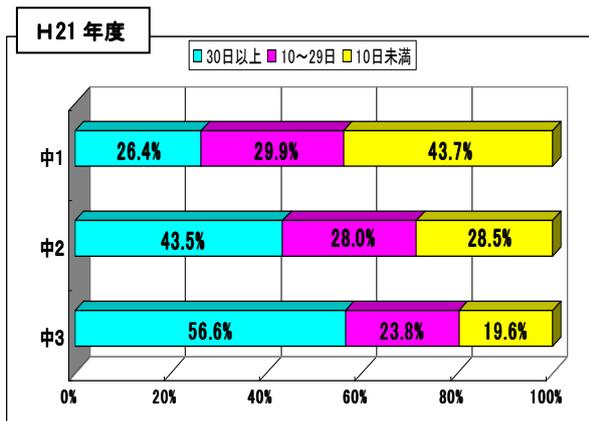


このグラフから、7月末時点の欠席調査では名前があがっていない欠席日数が「10日未満」の児童生徒が、小学校は約4割、中学校は約3割いることがわかりました。

このことから、**2学期以降の取り組みの鍵は、この子どもたちに対する支援をどう行うか**にあると思います。

さらに、中学校において学年別で調べたものが下のグラフです。

30日以上欠席した生徒の欠席日数別人数の学年別割合(7月末時点)



中学3年生では、7月末時点で欠席日数が既に「30日以上」になっている生徒が50%を超えています。一方、中学1年生は、「10日未満」の生徒が4割以上いることがわかりました。この**2学期以降に休み始める1年生への対応が、中学校では重要なポイント**になります。

### ☆ 取り組みのポイント ☆

#### 1 子どもたちのサインを見逃さず、適切な初期対応を講じる。

- ・ 高知市の「不登校対応スタンダード」の実行  
欠席1日でも電話連絡。2日続いたら電話連絡か家庭訪問。  
3日になったら必ず家庭訪問。
- ・ 「初期対応のための支援シート」の活用 → 教育相談班へご連絡を



#### 2 予防的な取り組みを積極的に行うことで、学級経営の改善を図る。

- ・ Q-Uの結果から学級の弱点を把握する。
- ・ 「あったかプログラム」をはじめとする人間関係づくりプログラムを計画的に実施する。